

自然と精神 ——『イデーⅡ』から『自然と精神』へ——

浜渦 辰二

はじめに

私がちょうど20年前に初めて活字にした論文「フッサールにおける「心身」問題」¹は、フッサールの『イデーⅡ』²を使いながら、それをデカルトとの対比のなかで論じたものでした。この『イデーⅡ』は、昨年、前半部分だけ邦訳³が出版されましたが、当時は、もちろん翻訳などはなく、一人で悪戦苦闘して読み上げ、自分なりの理解と問題意識で書いた論文でした。また、7年前に博士論文をもとに刊行した拙著『フッサール間主観性の現象学』⁴は、それに先立つ2年間のドイツ留学時代にフッサールの『間主観性の現象学』3巻本⁵を読み上げ、その成果を踏まえて完成させたものでした。この『間主観性の現象学』3巻本は、昨年拙訳が刊行されました『デカルト的省察』⁶の背景を理解するには不可欠のものです。ほかにも、フッサール現象学の全体像を理解するには、翻訳が出ていないようなテキストの読解が不可欠というものが多くあります。翻訳どころか、原語ですら、長く未公刊草稿としてその存在は知られていたものの、フッサール・アルヒーフまで草稿を読みに行かないと目にするのでできなかったテキストもあり、それらが少しずつ公刊されて来ています。昨年そうしたテキストが2冊刊行されましたが、そのうち一つは『ベルナウ時間草稿』⁷で、もう一つが、ここで私が採り上げる『自然と精神』⁸という1927年の講義草稿です。これは、『イデーⅡ』とも関連が深く、また晩年の『危機』書

¹ 拙稿「フッサールにおける「心身」問題」（九州大学哲学会編『哲学論文集』第18輯、1982年）参照。

² Edmund Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Zweiter Buch*, Husserliana Bd. IV, Martinus Nijhoff, 1952.

³ 立松弘孝・別所良美訳『イデーⅡ-I』、みすず書房、2001年。

⁴ 創文社、1995年。

⁵ Edmund Husserl, *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität, Erster Teil: 1905-1920*, Husserliana Bd. XIII, Martinus Nijhoff, 1973; *Zweiter Teil: 1921-1928*, Bd. XIV, 1973; *Dritter Teil: 1929-1935*, Bd. XV, 1973.

⁶ 岩波文庫、2001年。

⁷ Edmund Husserl, *Die Bernauer Manuskripte über das Zeitbewusstsein (1917-18)*, Husserliana Bd. XXXIII, Kluwer Academic Publishers, 2001.

⁸ Ders., *Natur und Geist, Vorlesungen Sommersemester 1927*, Husserliana Bd. XXXII, Kluwer Academic Publishers, 2001.

⁹へ繋がっていくものでもあるということで、私としてもずっと気になっていたテキストです。本日は、このテキストとその問題の広がりをご皆さんに紹介して、その面白さを伝えたいと思います。また、そこで扱われていることは、私が近年学内で理系の先生方と共同研究をするなかで、考えざるをえなかった問題とも関係してきますので、最後に、その話に繋げていきたいと思います。

1. 『イデーⅡ』から

『自然と精神』という題で昨年出版された『フッサール全集』第32巻は、同名の1927年の講義草稿を本文とし、関連する補遺をつけたものです。資料の年表¹⁰を見ていただくと分かりますように、この講義の系譜を辿ると、1921年の講義、1919年の講演と講義、1915年の演習、1913年の講義、1912年の演習に遡っていき、それは、1913年に出版された『イデーⅠ』に続けて執筆されていた『イデーⅡ』『イデーⅢ』の草稿にも繋がっており、そのあたりから生まれた問題意識だと分かります。そこで、初めに簡単に『イデーⅡ』に触れておきたいと思います。

この『イデーⅡ』というテキストの固有性と魅力は、すでに周知のことと思います。プログラムの『イデーⅠ』に対して、具体的な分析を行うのが『イデーⅡ』ですが、『イデーⅠ』の脱稿後、直ちに書き継がれていたものの、1928年に至るまで15年間、繰り返し書き直してもまとまらず、エディット・シュタインによって編集され（1918年）、さらにラントグレーベが受け継いでタイプ草稿を作る（1924/25年）ところまでいっていたにも拘わらず、生前に出版には至らず、未刊草稿が1952年になって『フッサール全集』の第4巻として刊行されました。そんな経緯もあって、『イデーⅡ』は大変面白い半面、扱いにくい未完成のテキストです。充分まとまりがないのがかえって、いろいろな読み方を可能にしているとも言えるかも知れません。そのためもあって、それが与えた影響の点では、『イデーⅠ』以上のものがあります。

例えば、ハイデガーは、1925年マールブルクでの講義『時間概念の歴史への序説』¹¹の時期に『イデーⅡ』の草稿を読んでいます。翌年1926年4月8日フッサール

⁹ Ders., *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, Husserliana Bd. VI, Martinus Nijhoff, 1976.

¹⁰ 本稿末につけた年表を参照。なお、年表作成にあたっては、主に次の文献を参照した。Karl Schuhmann, *Husserl-Chronik, Denk- und Lebensweg Edmund Husserls*, Husserliana Dokumente Bd. I, Martinus Nijhoff, 1977.

¹¹ Martin Heidegger, *Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs*, Gesamtausgabe II. Ab., Bd. 20,

67歳の誕生パーティの席で、「尊敬と友情をこめて」フッサールに献呈されたハイデガーの『存在と時間』は直接名指すことなしにフッサール現象学への強烈な批判を含んでいますが、それに先立つこの講義『序説』は、ハイデガーがもっとも丁寧にフッサール現象学を辿り、手際よく論点を纏めながら批判を加えてゆき、そのなかから『存在と時間』で展開される思索が熟成していくという、言わばフッサール現象学への訣別を宣言する講義とも言えます。その講義のなかでハイデガー自身、フッサールの未刊草稿に目を通していていること、とりわけ『イデーニⅡ』の草稿も読んでいたことを述べており、『存在と時間』の「世界内存在」の叙述は、『イデーニⅡ』から着想を得ていると考える研究者もいます¹²。

また、フッサールの死後1938年に遺稿がルーヴァンに救出され、そこにフッサール・アルヒーフが設立されてまだまもない1939年に、メルロ＝ポンティがやってきて、『イデーニⅡ』の草稿を読み、1945年に出版されることになる『知覚の現象学』のための着想、特に「身体」「自然」についての着想を得た、ということはよく知られています¹³。その後も、メルロ＝ポンティがこの『イデーニⅡ』草稿に強い関心をもっていたことは、1950年代の講義「自然の概念」¹⁴にも現れています¹⁵。さらに、晩年にフッサールのもとで学び、いち早くフッサール現象学をフランスに広めるのに一役買ったレヴィナスも、その主著『全体性と無限』¹⁶に見られる「真理は正義を前提としている」という考えなどは、『イデーニⅡ』の「自然主義的態度は人格主義的態度に従属する」という考えから着想を得たのではないかと指摘する研究者もいます¹⁷。

いまはこれらに立ち入ることはできませんが、ともかく、『イデーニⅡ』というテキストには、問題としては、「自然」「精神」「身体」「人格」「自然主義的態度と人格

Vittorio Klostermann, 1979.

¹² 『存在と時間』の或る注でハイデガーは次のように述べています。「以下の研究が“事象それ自身”の開示において前進しているとすれば、そのことを著者はまず第一にエトムント・フッサールに負っている。彼は、著者のフライブルクにおける習得の時期の間中、透徹した個人的指導を未発表の諸研究をこの上もなく自由に閲覧させてくれたことによって、現象学的探究のさまざまな諸領域に著者を習熟させてくれたのである。」(Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Gesamtausgabe I. Abt., Bd. 2, S. 52)

¹³ H・L・ヴァン・ブレダ(前田耕作訳)「モーリス・メルロ＝ポンティとルーヴァンのフッサール文庫」、現象学研究会編『現象学研究』創刊号、せりか書房、1972年。

¹⁴ Maurice Merleau-Ponty, *La Nature*, Notes Cours du Collège de France, SEUIL, 1995.

¹⁵ 詳しくは、最近出版された加國尚志『自然の現象学』(晃洋書房、2002年)を参照されたい。

¹⁶ Emmanuel Levinas, *Totalité et Infini*, Martinus Nijhoff, 1971.

¹⁷ Vgl. Steven Galt Crowell, "The Mythical and the Meaningless: Husserl and the Two Faces of Nature", in: Th. Nenon & L. Embree (eds.), *Issues in Husserl's Ideas II*, Kluwer Academic Publishers, 1996. 因みに、レヴィナスは、1928～29年にフッサールのもとで学び、29年2月パリ講演を聴き、その仏訳にも貢献しました。

主義的態度」そして「生活世界」の萌芽などなど、興味深い問題が満載されています。また、全体の骨組みとして興味深いのは、全体が「物質的自然」と「動物的〔アニマをもった(animalisch)〕自然」と「精神的世界」という三つの領域の構成を論ずるという形になっていますが、それが初めは「一方的基づけ関係」という考え方に従っているかのように始まりますが、やがて考察が進むに従って、「絡み合いの相互関係」が明らかになってきます¹⁸。自然の根底に精神が発見され、逆に、精神の根底に自然が発見されることとなります。それは、初めは「自然主義的態度」が基礎的なものであるかのように始まりますが、あとから出てくる「人格主義的態度」が実は根源的であることが分かって来るという形で転換が行われます。この『イデーⅡ』のテキスト内部に言わばそうした視点の転換が孕まれているのですが、更に、それをフッサールの本来の目標と照らし合わせると、もう一つの転換が孕まれています。それは、第3篇「精神的世界の構成」の末尾に置かれた「自然の相対性と精神の絶対性」という結論は、あくまでも人格主義的態度ないし精神科学的態度に従った場合の結論であって、フッサールの超越論的現象学の本来の結論ではないということです。自然を素朴に前提している自然科学も、精神を素朴に前提している精神科学も、ともに自然的態度に立つ学に過ぎず、フッサールはそれらの根拠に問いを遡らせようとしているからです。

さて、しかしながら今日は『イデーⅡ』を扱うことが主眼ではありませんので、いまは、そこから続いてゆく講義草稿『自然と精神』へと目を向けていきたいと思えます。さきほど年表で見ましたように、フッサールが「自然と精神」というテーマに取り組み始めたのは、『イデー』の執筆時期である1912～1913年頃です。1912/13年冬学期では演習にこのテーマを採り上げ、翌年1913年の夏学期に初めてこの題で講義をしています。『イデーⅡ』との関連のなかで「自然と精神」というテーマは練られていったわけです¹⁹。

しかし、もう少し視野を広げて、フッサールの思索の流れを追うと、1911年の「厳

¹⁸ 『イデーⅡ』の最も原型的な草稿（1912年）ですでに、このような考えが述べられている（V:117-124）。なお、以下、『フッサール全集』の参照箇所は、このように、ローマ数字で巻数を、コロンを挟んで、アラビア数字でページ数を略記します。

¹⁹ 『イデーⅠ』の予告によると、第Ⅱ巻では、「いくつかの特に重要な問題群」を採り上げ、「現象学と自然科学・心理学・精神科学との関係を考えるための準備」とし、第Ⅲ巻では、「哲学の理念」を扱うことになっていました。ここで言う「重要な問題群」が膨らんできて、それだけで第Ⅱ巻を形成することになり、現象学と諸学との関係は第Ⅲ巻に回され、第Ⅲ巻で取り扱う予定だった「哲学の理念」は、その後の1923/24年の講義「第一哲学」にまで見送られることになりました。

密な学としての哲学」²⁰における、自然主義と歴史主義という、当時の現代哲学の対立する二つの傾向に対する批判も、この文脈に入ってきます。1879年ヴントがライプツヒ大学に初めて実験心理学の講座を開設して以来、1912年頃には、ドイツの大学では哲学のポストがますます実験心理学者によって占められるようになっていました。そんな時代のなかで、自然科学的な心理学とは異なる心理学を確立することと、フッサールが現象学を確立することとは、目標は異なりながらも、戦いの相手を共有する場面でもありました。だからこそ、フッサールは現象学と心理学の微妙な、しかし決定的なニュアンスの差を論じる必要があったのです。これが、「自然と精神」というテーマの一つの支流となり、1917年の草稿「現象学と心理学」²¹から1925年の講義『現象学的心理学』²²へ流れていきます。そして、「自然と精神」というテーマの周辺にあるこれらの問題とともに、最晩年の『危機』書に連なっていくわけです²³。

2. 『自然と精神』まで

さて、講義草稿『自然と精神』へと視野を収斂させていきたいと思います。

前述のように、『イデーⅡ』は「自然と精神」という問題を巡りながらも、自然科学と精神科学それぞれが前提している自然概念と精神概念を分析し、それぞれにおける領域の構成を考察しましたが、自然科学と精神科学の区別と関係、そして現象学とこれら諸学との区別と関係については、『イデーⅢ』で簡単に触れるにとどまっていました。その後の「自然と精神」と題する講義は、そこで残された学問論（科学論）的問題²⁴が中心になってきます。

フッサールがこのようなテーマに取り組む背景にあったのは、『イデーⅡ』の「第3編 精神的世界の構成」の冒頭でも触れられているように²⁵、当時の学問論（科学論）をめぐる論争、とりわけ、実証主義・自然主義の動きに対して、ディルタイ、

²⁰ Edmund Husserl, "Philosophie als strenge Wissenschaft (1911)", in: *Aufsätze und Vorträge (1911-1921)*, Husserliana Bd. XXV, Martinus Nijhoff, 1987.

²¹ Edmund Husserl, "Phänomenologische Psychologie", in: *Ibid.*

²² Ders., *Phänomenologische Psychologie, Vorlesungen Sommersemester 1925*, Husserliana Bd. IX, Martinus Nijhoff, 1968.

²³ 1935年のプラハ講演は「ヨーロッパ諸学の危機と心理学」と題され、『危機』書の第3部Bは「心理学から出発する、現象学的な超越論哲学への道」と題されています。

²⁴ 周知のように、ドイツ語"Wissenschaft"は「学問」とも「科学」とも訳せますので、"Wissenschaftslehre"は「学問論」とも「科学論」とも訳せます。

²⁵ IV: 173.

ヴィンデルバント、リッケルト²⁶、ジンメル、ミュンスターベルクらが加わった、自然科学と精神科学をめぐる論争でした²⁷。つまり、ウィーン学団（統一科学）を中心とした実証主義・自然主義の流れと、それに対抗する、ディルタイの解釈学・精神科学、および、新カント学派の「自然科学と精神科学」「自然科学と文化科学」の差異を強調する流れとの間で行われた、19世紀末の学問論（諸学の分類、諸学の関係、諸学の基礎づけ）に対して、現象学の立場からする学問論を展開することがフッサールのねらいでした²⁸。

もう一度、年表をご覧になると分かりますように、フッサールは、ハレ私講師時代の1897年以来、繰り返し、カントおよびカント後の（当時の）現代に至るまでの哲学を取り上げ、個人的な交流もあった新カント学派²⁹の哲学も取り上げて来ています。1905年の歴史哲学と題された演習では、ディルタイとともにリッケルトが取り上げられています。1924年には、カント生誕200年記念にフライブルク大学で記念講演「カントと超越論哲学の理念」³⁰を行っています³¹。1927年の講義「自然と精神」と同じ学期の演習でも、カントを扱っています。こうした背景のなかで、1927年の講義「自然と精神」でも、フッサールのカントおよび新カント学派との関係が、前面に出て来ています³²。

²⁶ ディルタイ『精神的世界の構成』（1910年）、ヴィンデルバント『歴史と自然科学』（1894年）、リッケルト『文化科学と自然科学』（1898年）などを参照。

²⁷ 先に触れたハイデガーの1925年の講義『時間概念の歴史への序説』の冒頭箇所でも、「第4節 19世紀後半における哲学の状況、哲学と科学」において、実証主義、新カント学派、ヴィンデルバントとリッケルト、ディルタイとの対比において、ブレンターノとフッサールによる現象学が登場する意義が論じられています。

²⁸ とりわけ、講義「自然と精神」のなかでもヴィンデルバントと並んで大きく採り上げられているリッケルトとの関係については、注目しておいていいでしょう。1911年の論文「厳密な学としての哲学」は『ロゴス』という雑誌の第一巻第三分冊に掲載されましたが、これはリッケルトが中心に編集されていた雑誌で、1910年の初めに、リッケルトの依頼により、フッサールも編集協力者になっていました。フッサールはこの頃からリッケルトと書簡による交流（1910-1932）があり、家族を含めた個人的な交流もありました（Edmund Husserl, *Briefwechsel*, Bd.V, Die Neukantianer, Kluwer Academic Publishers, 1994）。また、フッサールが1916年フライブルク大学に招聘を受けたのは、ヴィンデルバントの後任としてハイデルベルク大学に転出したリッケルトの後任としてでした。

²⁹ 『フッサール書簡集』第5巻は「新カント学派」と題され、（有名な人だけ挙げると）カッシーラー、ラスク、ナトルプ、リッケルト、リール、ヴァイヒンガーらとの往復書簡が収められている。前の注で挙げた『書簡集』参照。

³⁰ Edmund Husserl, "Kant und die Idee der Transzendentalphilosophie (1924)", in: *Erste Philosophie (1923/24)*, *Erster Teil*, Husserliana Bd. VII, Martinus Nijhoff, 1956.

³¹ それをもとに論文にしており、それは、初め『カント研究』誌に掲載が予定されていましたが、フッサールは自ら取り下げてしまいました。自分の現象学が新カント学派に分類される危険を避けたとも言われています。

³² イゾ・ケルン『フッサールとカント』（Iso Kern, Husserl und Kant, *Eine Untersuchungen über*

カントとの関係で付け加えておくべきなのは、『危機』書において、「生活世界」が「カントの暗黙の前提」として導入されていることです。この発想は、遡れば、1912年に執筆された『イデーニⅡ』の最初の草稿にまで遡ることができます³³。その後、「生活世界」という用語は、1924年のカント講演、1925年の講義「現象学的心理学」、そして、1927年の『自然と精神』に収められた付論で現れます。講義本文の後ろの方でも、カントに言及しながら「超越論的論理学という方法」に触れ、「それによって経験世界のアプリオリで必然的な構造がえられる」(121)³⁴と述べていますが、この講義の後すぐに書き始められ、翌年には書き上げて1929年の『年報』に発表された『形式的論理学と超越論的論理学』³⁵の末尾で、「純粹経験の世界」を扱う「超越論的感性論」というカント的な響きをもつ課題が述べられていますが、その欄外注にフッサールは「生活世界」と書き付けています。こうして見ると、「生活世界」は、「自然と精神」をめぐる問題圏で、しかもカント批判という脈絡において登場してきたわけです。

もちろん、『危機』書の「生活世界」論は、もう一方で、ガリレオ以来の科学批判という文脈ももっています。この『自然と精神』講義でも、私たちが「物理学の発展の革命的な時期にいる」(10)ことが自覚され³⁶、にもかかわらず、自然科学においても精神科学においても、「不明瞭な根本概念に基づく個別諸科学によって、真の世界認識が不可能になっていること」(8)が指摘され、こうした諸科学の発展への歴史的批判的な回顧から、ますます増大する諸科学の個別化、技術化、自然主義によつ

Husserls Verhältnis zu Kant und zum Neukantianismus, *Phaenomenologica* 16, Maritinus Nijhoff, 1964)のなかでも、この講義草稿『自然と精神』は繰り返し言及されていますが、フッサールとカントおよび新カント学派との関係を考える時、これは重要なテキストとなるからです。

³³ すなわち、そこでは、こう述べられています。「カントの理性批判は明らかに、現象学を、そして、経験のより低い段階の構成への洞察を前提しており、それは、カントが捉えることのなかった課題である。……こうしたことすべてがカントには縁のないものだった。……あらゆる研究は、経験の所与から出発しなければならない。……そこから、与えるところの意識とそれら所与の構成の仕方へと反省的に遡らなければならない。……自然と精神のように、一段階で構成されるのではなく、多くの段階において構成される対象については、存在論はいつも大きな困難を抱えている。というのも、そもそも、存在論が現象学ではないからである。」(V:128f.)ここに言う「経験のより低い段階」とは、後には「生活世界的経験」とも呼ばれます。「カントは前学問的自然、あるいは普遍的直観的な生活世界を構成的研究の主題とすることはなかった」というのは、フッサールが後にも繰り返すことになるカント批判でした。

³⁴ 以下、本稿で中心的に採り上げている『自然と精神』の巻 (*Husserliana* Bd. XXXII) の参照箇所については、本文中括弧内にページ数のみをアラビア数字で略記する。

³⁵ Edmund Husserl, *Formale und transzendente Logik*, *Husserliana* Bd. XVII, Martinus Nijhoff, 1974.

³⁶ フッサールは当時の科学の最先端である、アインシュタインの相対性理論、マックス・プランクの量子論にも通じていました。フッサール・アルヒーフに保存されたフッサールの蔵書のうちには、アインシュタインの本が3冊、マックス・プランクの本が5冊残されています。

て、それらの内的理解が失われてしまったという、『危機』書にも繋がる科学批判のアイデアが生まれてきています。「危機」の時代に生きているという意識は、この頃から芽生えており³⁷、まさにそのような脈絡において、〈学問と生との解離〉と〈繋がり回復〉が改めて問われているのです。

3. 1927年講義『自然と精神』について

さて、本文に入るまでが長くなりましたが、1927年の講義「自然と精神」に入っていくことにし、まずは、序論の重要と思われる論点を列挙することから始めます。

第一に挙げるべきことは、フッサールがここで、まず、1911年以来の「厳密な学としての哲学」という理念を改めて掲げ、しかも、それを科学批判のなかで論じていることです。フッサールは哲学と個別諸科学の関係から考察を始め、現代における個別諸科学の発展は、個別諸科学の「不健康な独立化」(9)から生じ、「哲学と科学の対立」(9)をもたらしたが、私たちはいま、それに対する「反動」(9)の時代にあり、それが「基礎への問い」(4)という現代の論争を生んでいる、と診断します。フッサールによれば、物理学においても生物学においても、その基礎のうちに「謎めいた分からないこと」(11)が潜んでいて、「実証的な諸科学の驚くべき成果」(13)のうちには、真理が「覆い隠され」、「謎に包まれて」いる(13)。諸科学は、「驚くべき建築技術による建物ではあるが、その基礎や建築材を見極めることは怠っている」(13)。そこに、それらの「前提を研究する方法」(13)と「基本概念の不可分の統一」(14)を研究する必要が求められており、それが「究極的基礎付けをもった唯一の普遍的な学問(Wissenschaft)」としての哲学の課題と考えられています。フッサールは、「あらゆる個別諸科学は、普遍学という一本の木に生き生きと繁る小枝である」(18)と、デカルトと同じように「一本の木」の比喩³⁸を使って、諸科学と哲学の関係を語っています。

第二に挙げるべきことは、にもかかわらず、フッサールの「哲学」の理念は、その木の幹を自然学(physica)と考えたデカルトとは異なっています。「自然科学を模

³⁷ カール・ビューラーの『心理学の危機』(Kahl Bühler, *Die Krise der Psychologie*)をフッサールは、ちょうど1927年6月、「自然と精神」講義の最中に読んでいます。

³⁸ ご存じのように、デカルトが『哲学の原理』仏訳者への手紙で述べた有名な「一本の樹」の比喩によれば、「哲学全体が一本の樹のようなもので、その根は形而上学、幹は自然学、この幹から出る枝は他のすべての諸学で、これは大別して三つの主要な学、すなわち医学、力学および道徳にまとめられます」(René Descartes, *Oeuvres philosophiques*, Tome III, Éditions Garnier Frères, p.779f.) という。この比喩によれば、「道徳」は「自然学」に基づくことになる。

範にして」(22)、自然科学の方法を精神科学にも持ち込むことで、「精神科学すら自然科学とみなし」(22)、いわゆる「統一科学」を作り上げようとする自然主義とは異なるということです。その点で、フッサールは、デカルトから離れ、デカルト的二元論と対決するとともに、自然主義とも対決することになります。1911年の「厳密な学としての哲学」のなかでも、当時の実験心理学の興隆から生まれた自然主義を批判していましたが、フッサールは早くから、自然科学を模範として形成された心理学は心的なものの固有の本質を取り逃がしてしまう、と確信していました。リッケルトと共感するところがあったのも、まさに、この点においてでした³⁹。19世紀の後半から20世紀の初めに広く流布していた自然主義的方法一元論に対して宣戦布告する点において、フッサールはリッケルトに大きな評価を与えていたのです。

第三に挙げるべきことは、フッサールは、「あらゆる実証的諸科学は常にあらかじめ与えられている世界に関わっている」(14)と述べて、前述の実証的諸科学の前提を「経験世界(Erfahrungswelt)」(15)と呼んでいることです。その世界は「あらゆる学問に先立って、それどころか、日常世界のあらゆる議論や命名や判断に先立ってそこにあり」(14)、個々の物はすべて、「一つの連関する存在地平から取り出して掴まれ、取り出して聞かれ、取り出して見られるものに他ならない」(15)ので、「世界は物を単に合計したものではない」(15)と言われます⁴⁰。

第四に挙げるべきことは、フッサールは1902年頃からアヴェナリウスの「自然的世界概念」の考えに関心をもち、1910年の講義『現象学の根本問題』⁴¹でもそれを採り上げていましたが、『自然と精神』講義でも簡単に言及しています。上の第三点として述べたことは、この「自然的世界概念」(7)にも通ずる考えでしたが、フッサールにとっての目標は、自然的世界概念をただ回復することではなく、この世界に立ち帰って、実証的諸科学が、自然に、素朴に、その上に立っている「あらかじめ与えられた経験世界という自然的基盤」(7)を解明することで、この世界に関係する学問を基づけることでした。だからこそ、そうした探求が「超越論的なもの」(7, 19)に導くと述べることを忘れてはいませんでした。

³⁹ フッサールはリッケルト宛の書簡でこう書いています。「私たちは、共通の敵である、私たちの時代の自然主義に対して同盟者として闘っている」(リッケルト宛書簡、1915,12.20)。

⁴⁰ 2年前の1925年の講義「現象学的心理学」でも、「学問的テーマとしての自然と精神はあらかじめそこにあるのではなく、或る理論的関心のうちで形成される」ものだから、「根源的に直観的な相互に交錯した仕方です」与えられる「前学問的な経験世界へと立ち帰る」必要が主張されていました(IX:55)。

⁴¹ 『間主観性の現象学』第I巻(『フッサール全集』第13巻に収録されています(Nr. 6: Aus den Vorlesungen "Grundprobleme der Phänomenologie" Wintersemester 1910/11)。

第五に、この「経験世界」の特徴づけについて、追加しておかねばなりません。これについて、この講義では、「現代の科学的文化のうちに生きている個々人にとって、それどころか、そうした文化を知らない人間にとっても、“その”世界は、あらゆる学問に先立って、いやそれどころか、日常世界のあらゆる語りや命名することや判断することにすら先立ってそこにある」(14)とされています。すなわち、「経験はそれ自身では無言」(15)で、「経験の統一において、すべての語りと熟考と理由を言うことに先立って、破れ目のない、それ自身関連し合っている、一つの世界がある」(15)と言われます。それゆえ、基礎研究という課題は、「概念をもたない沈黙の経験から出発する」(16)必要があり、「概念的にまだ無言の経験とその経験世界への還帰」(26)が必要だと言われています。ここでは、はっきりと学問と経験が対置され、学問と「前学問的な生」(15)が対置されています。この点については、のちに振り返ることにします。

以上が序論で、このあと講義は本論に入り、第1章で、「自然と精神の意味をめぐる、自然科学と精神科学の間で数十年間続いている論争」(20)から、諸学問の分類という根本的テーマへと振り返って取り組む必要が説かれます。そこで、第2章では、「アプリアリとアポステリアリ」「形式的と事象的」「具体的と抽象的」「自立的と非自立的」といった「諸学問の形式的な分類」が論じられ、第3章では、「諸学問の事象的な分類」として、「物的なものとの心的なもの」というデカルト的の二元論に基づく分類が論じられ、そこから更に、「方法による分類」として、ヴィンデルバントとリッケルトを批判的に論じた節が始まります。いまは、この節へと急ぎたいと思います。

ヴィンデルバント⁴²が、自然科学は「法則定立的(nomothetisch)」であるのに対し、歴史に代表される精神科学は「個性記述的(idiographisch)」であると特徴づけたこと、それを基本的には継承しながらも改訂を加えて、リッケルト⁴³は、自然科学は「普遍的(generalisierend)」であるのに対し、文化科学⁴⁴は「個体化的(individualisierend)」であると主張したことは、いまは周知のこととして、説明は省きます。ともかく、彼らがこのような議論によって、自然科学を精神科学の「模範」と考えようとする「自然主義」⁴⁵に対抗して、自然科学と文化科学の違いは「領域による違い」ではな

⁴² 『歴史と自然科学』(1894年)などを参照。

⁴³ 『自然科学的概念形成の限界』(1896年)や『文化科学と自然科学』(1898年)などを参照。

⁴⁴ リッケルトは、心理学の扱いをめぐる、ヴィンデルバントとは異なる考えから、心理学が中心に響きかねない精神科学に替えて文化科学という名称を使っています

⁴⁵ 代表としてここではベッヒャーが挙げられていますが、「厳密な学としての哲学」ではヘッケルトとオスヴァルトが挙げられていました。いずれもほとんど無名です。

く、「方法による違い」であり、同じ対象についても方法によって自然科学と精神科学が分かれてくると、精神科学・文化科学の方法の独自性を主張した点において、フッサールは共同戦線を張ることができると考えていました⁴⁶。

リッケルトの方法論に対するフッサールの批判は、もっぱら、「普遍化」と「個体化」という純粋に形式的な規定と演繹に向けられています。続く第4章では、この批判を「超越論的演繹の二つの道」(103)として論じ、リッケルトの「道」を「普遍学(mathesis universalis)から出発し、超越論的演繹へと、形式的に降りてくる道」すなわち「上からの道」と断じて、それに対して、「経験世界から出発して、超越論的演繹へと、直接に登っていく道」(112)すなわち「下からの道」を対置しようとしています⁴⁷。リッケルトの演繹を「形式主義」(105)と断じて、それをむしろ、「伝統的形式的論理学に対して超越論的論理学の理念を対比させた」(111)カントを担ぎ出すことによって批判しようとしています。フッサールはここで、カントを拠り所にして新カント学派を批判しており、カントを現象学者として新カント学派のリッケルトに対抗させている(イゾ・ケルン)、と言ってもいいでしょう。

ここで「下」と呼ばれているのは「経験世界」のことで、こうして講義は、第4章から第5章にかけて、「経験世界」の現象学に入っていくこととなります。しかし、注意すべきは、フッサールにとって「経験世界」とは、決して「純粋経験」の世界ではなかったということです。それは「本来的に経験されるものの野と本来的には経験されていないものの開かれた地平と」(113)から成っており、「見えるものを越えて、開かれた無限が広がって」(116)います。それゆえ、「すべての知覚は、予料的な志向(Intention)と充実の混合(Gemisch)」(137)であり、そこには、「経験的に与えられたものから与えられていないものへ、予料されたものへの一種の推論としての帰納(Induktion)」が「初めから含まれて」(138)います。「ひとが連合〔=連想〕(Assoziation)と呼んでいるものが、初めからすでに、あらゆる端的な知覚の構造に属

⁴⁶ そして、その点においては、ディルタイも同じ側に立っていると考えていました。ディルタイについては、2年前の講義「現象学的心理学」(Husserliana Bd. IX)の序論で詳論されています。ディルタイとの関係について、詳しくは、榊原哲也「フッサールとディルタイ」(西村皓ほか編『ディルタイと現代』、法政大学出版局、2001年)を参照。

⁴⁷ この「下から」という言い方をフッサールは、自分の現象学を新カント学派と対比させるために繰り返し使っています。すでに、1909年のもう一人の新カント学派(マールブルク学派)のナトルプ宛の書簡で、こう書いています。「単に誤った経験主義的・心理学主義的な〈下〉ではなく、真正の観念論的な〈下〉と呼ぶべきものがあり、そこから一步一步高みへと登っていくことができる。……根本的な問題は現象学的な〈下〉に横たわっており、自然な歩みがそこから頂上の問題へと導くのでなければならない。」(ナトルプ宛書簡、1909.3.18)このナトルプとも、1894年から1924年まで、30年も続いた書簡での思想的交流をもっていますが、いまはこれについても触れる余裕はありません。

している」(140)わけです。したがって、「私たちの現在の知覚は、それに先立つ経験する生の遺産(Erbenschaft)」(144)であって、「生は、徹頭徹尾、歴史的」(147)である、とも言われます。「経験世界」は「純粹経験の世界」であるより、言わば「歴史的文化的な世界」となってきました。そして、このような脈絡においてフッサールは、この「経験世界」と「学問」の繋がりについて語り始めます。「学問は共同体生活の一つの機能である」(132)というようなことを述べたあと、「学問的な帰納(Induktion)は経験に基づく」(140)と題された第六章では、「前学問的は経験を、その根源的で常に前提されている帰納の働きにおいて理解しなければならない」(143)と述べています。学問的な帰納は、前学問的な経験において働いている帰納に起源をもち、それと繋がっているというのです。しかし、本文のテキストはこのような議論の途中で途切れてしまいます⁴⁸。

そこで、同様な議論を展開していた2年前の講義『現象学的心理学』⁴⁹から少し補っておきましょう。そこでも、「前学問的な経験世界への還帰」(55)とされていますが、同時に、「この世界は非常に変化する顔を持っている」(56)と言われ、「私たちの理論的または実践的活動から由来する考えが私たちの経験を覆っており」、「見られた、聞かれた、何らか経験されたこととして端的に見やることのうちで与えられるものは、よくよく見ると、それ自身が以前の精神活動の何らかの沈殿物を含んでおり」、「先立つ思考作用から離れて(frei)、純粹経験のうちに本当に前理論的な世界が見いだされるかどうかは疑問である」(56)と述べていました。さらに次年度、つまり「自然と精神」講義の前学期の講義「現象学入門」でも、「経験の世界」を論じながらも、「私たちヨーロッパ文化の人間にとって、諸学問はそこにあり、私たちの多面的な文化世界の一部であり、その妥当性がどうであれ、それらは、私たちが生きている経験世界のなかに共にある事実であり」、「それらは純粹な経験の世界としての世界の構成要素となっている」(XIV:39f.)と述べていました。ここには、『危機』書に登場する、いわゆる「生活世界の二義性」(クレスゲス)⁵⁰のテーマがすでに孕まれています。つまり、学問を究極的に支えている経験は、もはや沈黙した概念なき直観ではなく、具体的歴史的世界の経験となり、諸学問は生活世界のうちに自らの基礎をもつと同時に、具体的生活世界のなかに属していることになる、という問題です。

⁴⁸ 草稿が散逸したのかどうか、理由は不明です。

⁴⁹ 前注 22 参照。以下、この『フッサール全集』第9巻の参照箇所も、本文中括弧内にページ数のみをアラビア数字で略記する。

⁵⁰ Ulrich Claesges, "Zweideutigkeiten in Husserls Lebenswelt-Begriff", in: *Perspektiven transzendental-phenomenologischer Forschung*. Phaenomenologica 49, Martinus Nijhoff, 1972.

「自然と精神」講義では、そこまで議論が言っていませんが、リッケルト批判の節につけられた付論、初めに執筆されましたが本文では採用されなかった草稿には、少し別の角度からの議論がありますので、最後に、そこに目を向けたいと思います。この草稿では、リッケルトとは別の立場から精神科学の独自性を協調する主張として「生の哲学(*Lebensphilosophie*)」が取り上げられています。この「合理的学問に対する反動」(239)として「それなりに深い理由をもって」登場してきた潮流⁵¹が批判的に採り上げられます。しかも、先に触れておいた「生活世界(生の世界)」という語がこの巻において登場するのは、この脈絡においてなのです。

ここで、「私たちの時代の科学に敵対する反動」(240)である「生の哲学」に対する批判的な含みをもって、フッサールはこう疑問を投げかけています⁵²。「学問そのものが、生の一つの機能(*Funktion*)ではないのか?……学問は、統一的な生活世界の一部ですらあるのではないか?」(240)そして、こう続けます。「おそらく学問は、高次の段階で初めて危険になり、生を促進する代わりに生を抑圧するようになった一面性(*Einseitigkeit*)において病む(*krank*)ことになったが、この一面性は学問の本来の意味には属していない。おそらく、この一面性は〔学問の〕抽象的な絶対化にあり、それゆえ〔学問から〕生を疎外したこと(*Lebensentfremdung*)にあるのだから、学問が新たに、すべての抽象を直観の源泉から汲み上げ、決してそこから自分を引き剥がそうしないならば、すべては再びよく〔健康に〕なるだろう」(240)。ここでフッサールは、「学問」と「生」を分断し、対立させて、誤った「学問」の合理性を主張する潮流を退け、それと同時に他方で、合理的な「学問」に対して非合理的な「生」を対置しようとする「生の哲学」の潮流をも退けようとしていると言えるでしょう。

しかし、「生の哲学」が登場してきたのには「深い理由」があり、したがって、現象学は、「自らを生生の哲学とは呼ばないが、普遍的な学問としての哲学という真の古代的な意味を維持することにおいては、生の哲学である」(240)と述べ、それは、「学問と生との間の馬鹿げた緊張を乗り越え」ることであり、それゆえ、「現象学は学問的な生の哲学(*wissenschaftliche Lebensphilosophie*)である」(241)と述べています⁵³。

⁵¹ ここで念頭にあるのはデイルタイなのかベルクソンなのか、名前は挙げられていません。

⁵² 以下の箇所については、次の文献も参照。Bernet / Kern / Marbach, *Edmund Husserl: Darstellung seines Denkens*, Felix Meiner Verlag, 1989. (千田義光ほか訳『フッサールの思想』、哲書房、1994年)

⁵³ 因みに、1929年4月8日、フッサールの70歳の誕生日を記念して『70歳記念論文集』(『年報』の補巻)が贈られますが、それとは別に、デイルタイの高弟であるゲオルク・ミッシュも、記念の意味を込めて5月に、デイルタイとフッサールを論じた『生の哲学と現象学』を贈りますが、6月には、『デカルト的省察』や『形式的論理学と超越論的論理学』の校正の手を休めて、この本を熱中して読んでいます。

フッサールによれば、「あらゆる可能な学問は、生の現実との関係においてのみ意味をもつ」(241)のであり、それゆえ、学問と生とを対立させるのではなく、それらを繋ぐような哲学、生のうちにある根拠から学問を基礎づけるような哲学として現象学を考えているわけです。そして、講義の本来のテーマに話を戻せば、そのような現象学こそが、「自然と精神」という一見対立するかに見える二つの世界を根底から繋ぎ、お互いに尻尾を咬み合った二匹の蛇のような関係にある「自然科学と精神科学」の関係を根底から理解することを可能にしてくれるのです。

おわりに

さて、私自身の関心に振り返ると、私自身、もともと理系的な関心をもちながら文系に移って来て、文系の学部にも属しながら、理系的な関心も失うことなく、ここ数年来、学内で理系の人々とさまざまな共同研究を続けてきています⁵⁴。そんななかで、いつも文系の学問と理系の学問の関係の問題を考えてさせられてきていますが、それは、本日扱った「自然と精神」あるいは「自然科学と精神科学」という問題にも通じています。

例えば、一つの場面として、精神科医の人達と研究会⁵⁵を8年ほど続けてきていますが、彼らもまた、或る意味で医学という理系・自然科学系のなかにながら精神という文系にも関わってくる問題関心をもった人々です。彼らと話していると、彼らの精神医学という分野でも、同じような問題が議論されているようです。生物学的精神医学とアメリカのプラグマティックな『DSM-IV』の興隆によって、ヤスパースやビンズワングーから始まり、現代のブランケンブルクらに至る、精神医学ないし精神病理学における現象学的な潮流が途絶えようとしているとか、精神病理学の「消滅」⁵⁶とか言われています。そこでは、あらためて、生物学的・自然科学的な人間の捉え方と、それに対抗する現象学的人間学的な人間の捉え方の関係が問われています。そのような状況のなかで、『イデーⅡ』から『自然と精神』へのフッ

⁵⁴ これまでに、学内特定研究「広領域分野における学術・教育資料の情報体系分析と情報資源化に関する基礎的研究」(1996～1997年度)、教育研究学内特別研究採択プロジェクト「生物(人間)・環境システムの動態に対する環境変動の影響」(1997～1999年度)、国公立機関連携講義「生命科学：バイオテクノロジーは人間と社会をどう変えるか」(2001年度)に参加しました。

⁵⁵ 「臨床と哲学の研究会」(1993年8月より現在に至る)。その成果の一端は、平成12・13年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(2)研究成果報告書(代表者・浜渦辰二)『いのちとこころに関わる現代の諸問題の現場に臨む臨床人間学の方法論的構築』(2002年)を参照。

⁵⁶ 渡辺哲夫『二十世紀精神病理学史序説』、西田書店、2001年。

サールの思考のなかから、「自然と精神」「自然科学と精神科学」について論じられたことから学び直すことがあるのではないのでしょうか。

あるいは、もう一つの場面として、「21世紀は生命科学の世紀」とも言われます。しかし、それは生物学的な生命科学で済むことなのでしょう。「生命科学」、英語では"life science"、ドイツ語では"Biowissenschaft"あるいは"Lebenswissenschaft"という語が使われるようです⁵⁷。ここで、「生(Leben)」と「学(Wissenschaft)」が結びつけられるのを見ると、それは本日ご紹介したように、フッサールが『自然と精神』講義で目指していたことでもあったわけですが、今日の「生命科学」として流布しているものがフッサールの目指していたこととはとても言えません。現代の「生命科学」は、遺伝子やタンパク質の生物化学的研究によって人間の生命を解き明かそうとしています。そこには、人と人の間に生きる存在としての人間の生がますます見えなくなっているように思います。フッサールの言う意味での、解離してしまっている「生(Leben)」と「学(Wissenschaft)」を繋ぐような哲学がいま必要とされているのではないのでしょうか。それをフッサールは現象学という名で探究していたのです。

付記

本稿は、第1回フッサール研究会において口頭発表された後、加筆・訂正を経て、「フッサールにおける自然と精神—『イデーⅡ』から『自然と精神』へ—」（静岡大学人文学部『人文論集』第53号の1、2002年7月発行）として発表された。

また、その英語版が、2002年11月6日～10日プラハ(チェコ)で開催された Issues Confronting the Post-European World / A conference dedicated to Jan Patočka (1907-1977) on the occasion of the founding of the Organization of Phenomenological Organizations (OPO)にて口頭発表され、OPO ウェブサイト (<http://www.o-p-o.net/>) にて公開された。

⁵⁷ ご承知のように、英語の"life"にしてもドイツ語の"Leben"にしても、日本語では「生命」「生活」「人生」「生」とさまざまな訳語をもっており、また、英語の"science"が自然科学的なニュアンスが強いのに対し、ドイツ語の"Wissenschaft"は原義は「知(Wissen)の体系(-schaft)」として、「科学」「学問」「学」とさまざまな訳語を持っています。したがって、"Lebenswissenschaft"は、「生命科学」「生活科学」「人生の学」「生の学」とも訳せるし、場合によっては、「生命学」とも訳せるでしょう（これは、森岡正博『生命学への招待』勁草書房、1988年が独自のアイデアで提唱している学の名称ですが）。